姥ときめき

姥ときめき

田辺聖子

新潮社版

姥(うば)ときめき

一九八四年五月一日　印刷
一九八四年五月五日　発行

著　者　田辺聖子(たなべせいこ)
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―二六六―五一一一
（編集部）03―二六六―五四一一
振替東京四―八〇八
印刷　二光印刷株式会社
製本　大口製本株式会社
定価　九五〇円

© 1984, Seiko Tanabe
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-313419-4 C0093

姥ときめき＊目次

姥ときめき……7
姥見合……45
姥湯ざめ……83
姥なぜ……121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

姥ひや酒……159
姥探偵……195
姥雲隠れ……231

装幀　村上豊

姥ときめき

姥ときめき

浦部謙次郎の名前を思い出したのは、ひょんなことからである。
私は今年七十七になる。
世間では喜寿の祝い、というのをなさるそうである。
「おばあちゃんもやりまほか、ウチへみんなに集まってもらうか、それとも『吉兆』でもいって、何ぞ美味しいもん食べてお祝いしまほか」
と五十四になる長男が電話でいってきた。
「いや、もうそんなあほらしいこと、せんでもええ」
と私は言い捨てる。
「七十七になったいうたかて、今日びはそのぐらいの人、何ぼでもいやはる。栄養のわるい貧乏な昔なら、長生きも徳のうちやろうけど、今日びはバカでもアホでも八十九十まで生きるご時勢や。七十七くらいで祝うてたら人さまに嗤われますがな。わたしが百ぐらいまで生きて、やっぱりまだこない性根がしっかりしてたら、そのときは祝うてんか。もっとも、そのときはあんたらのほうが先にイテもうてるかもしれへんけど。ホッホッホ」
「さよか。……しかしおばあちゃんのクチもあいかわらずえげつないなあ。昔より、ものすごう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

なりはったん、ちゃいますか」
「としとったらアタマぼけるんやさかい、そのぐらいになってちょうどよろし。愛されるトシヨリいうのはボケの異名やろ」
「なんなといいなはれ。こっちゃ、喜寿のお祝いに家紋の風呂敷でも染めて配って、紫縮緬の座蒲団でも作らして、なんて思うてたのに……おばあちゃんも、考えたらずーとえらい一生やったんやから、ここらでちと、のんびりしたらどないでンねん。……そやから、みんなで寄って、えらい目ェしてきたおばあちゃんに、感謝とねぎらいとお祝いの宴でも張ろうか、という……」
「ああもう、やめてんか、あほくさ」
私はそういう「一族郎党の長」がいいそうな文句がどうも身にそぐわないのである。この長男はそれが好きな男である。正月には一族を自分の家に集め、自分は床の間の床柱を背にして、
「おめでとう——今年もよろしィに」
とおうように挨拶したり訓辞をたれたり、というのが好きである。長男は大阪の船場で先祖代代の繊維関係の会社を持っていて、社長をやっているが、そのせいだけではない、昔、私の舅が正月元旦に「山勝」（ウチの屋号である）の新しい法被を着た店の者たちをあつめて祝膳の席につき、ずらりと一座を見渡して、
「あけましておめでとうさん。旧年中はいろいろとご苦労やった。今年もまた、旧年にまさって、一そう、気張って仕事に励んでおくれやす。また、めいめいに気ィつけて、息災につつがのう働けるように、体は大事にせな、あきまへんデ。よろしおすな」
と挨拶をした、あの血筋が脈々と伝わっているらしい。長男はけじめと称して、何ごとにつけ、一席ぶちあげるのが好きな男である。

また一族の長、という恰好が好きなので、私が長男と同居せず一人ぐらしをしているのを不満に思っている。私が長男の家にいれば、次男や三男も長兄のところへ年始の挨拶にくるであろうに、私は一人、東神戸のマンションで気らくなくらしをやっているものだから、誰も長男のところへ来ないと、むくれているのである。

「けじめがつきまへんがな」

と長男はふくれるのである。

しかし私としては、たとえばお正月、舅がそう挨拶すると、奉公人代表で、大番頭の定七がうやうやしく、

「あけましておめでとうごわりま。本年も旧年にあいかわりませず……」

などとやっていた、あの物々しさをつい思い浮べてしまう。姑が「お家はん」、私が「ご寮人さん」、晴着で二人して、舅や夫はじめ奉公人の男たちにずうーっとお酌してまわり、年酒をついでゆく。船場の商家のしきたりでは、正月の祝膳でさえ、浮き浮きした声は聞かれない。みな黙々と頂いて、おごそかできちんとしている。人によれば（長男なんぞは）あの正月風景や、舅（親旦那さん、とよばれていた）の挨拶をなつかしく思うであろうけれど、私はことさら、どうという感慨もない。

それより私には、そのすぐあとに来た、第二次世界大戦のあとの混乱のほうが、ずうっと印象ぶかいのだ。

船場の商家の秩序は崩壊してしまった。空襲でどこもかしこも焼野が原、疎開先の田舎に居付いて、よう大阪へ帰れなかった船場人も多い。

戦後のインフレと税金で、伝来の土地を売り払った人も多い。

私のうちでも、舅・姑は腑抜けのようになってしまった。夫はさいわい、兵隊にとられるトシではなかったけれど、これもオタオタして呆然自失、私は焼けのこった家財道具を売ったり、いろんな商売を試みて食いつなぎ、追い追い復興するに従って、もともとの商売をはじめるようになった。そのとき銀行が融資に応じてくれたのは、家のノレンや夫の顔ではなかった。

そんなもの、ひっくり返って煙のように消えている。誰もそれに価値を認めていない。

あとへ残ったのは新しい信用と顔である。つまり、私のファイトである。

「奥さんには負けますわ」

と銀行はいいよったではないか。

それで店の復興ができた。船場の、昔ながらの土地に、「株式会社　山本勝商店」の看板を再びあげることができた。社長は夫だったが、それは名目だけで、実際に切りまわしていたのは私である。

夫の死後も、息子を社長にしたものの、まだまだ私ががんばらなければならなかった。幸い景気がよくなり、そのときに思いきって五階建てのビルを計画しておいてよかった。

（ビル、なあ……）

と息子らは尻ごみしていたが、見よ、今ごろの不景気だったら、建つどころではなかったろう。あのときに建てればこそ、である。

もういいだろうと私は息子にあとをゆずって引退したが、それは実業界を引退したということで、まだ人生は引退していない。いろいろいそがしい。

それはともかく、自分で苦境を切りぬけてきたと思う私は、文句や挨拶ばかりぶちあげて、実際に非力な人間というのに、共感がもてないのである。

「けじめ」も、時にとっては大切ではあるが、形式的で事大主義な「けじめ」には、反撥を感じてしまう。私にいわせれば「けじめ」ばっかりつけてるあいだに、実体はどんどん変ってゆくのである。

それに長男は、

（おばあちゃんも考えたらずーとえらい一生やったんやから）

というが、「けじめ好き人間」、「一席ぶちあげ好き人間」に限って、「回顧派」であるのだ。

すんだことをふり返って、

（波瀾万丈やった……）

などと自分で自分をいたわってるのなど、感心しない。

「えらい目ェするのは誰も同なじやから」

と私がいったら、長男は、何しろ「一席ぶちあげ好き」人間であるから、

「ほんま、そらそうや、この不景気の折に会社張っていく、いうのも、いうにいえんエライもんや、ワシらでも」

と自分で自分に感心している。

ちがいますがな。

「えらい目ェは、誰でも当番でくるのや、町内会で『掃除当番』いう札がかかりまっしゃろ、マンションでもゴミ集めの日の掃除、月番になってるとこありますがな、えらい目ェもそうやって当番制や」

「誰がきめましてん」

「そう神サンやろ」

「何をいうてはりまンねん、ほな、もう喜寿の祝い、せえへんのやな」
「要らん」
「要らん、やて。もちっと可愛らしィにいえまへんか、ほなもう、よろし」
長男は電話を切ってしまう。なぜか長男としゃべると、いつもこういうケンカになる。面と向ってもそうなるのだから、電話だとよけいである。
当番制というのはふっといま、口から出たのであるが、もともと生きること自体がエラいことなのではないか、と私は七十年生きて思うようになった。
ラクをして世渡りできると思ってはいけない。人間はこの世に生れおちるとすぐ、神サン（か、超越者か、誰か分らない大きな存在）が、「当番」の札を人間の首にかけられる。
そう、私はにらんでるのである。この神サンは人間を「えらい目」にあわせる「えらい目当番ふりあて役」なのである。
「死にわかれ当番」
「生きわかれ当番」
「病気当番」
「災難当番」
いろいろ、七苦七難の割り振られた当番がどの人間にもあって、神サンはその当番表をにらんで、
（ホイ、歌子には会社再建当番）
という当番を割りあてられる。私は必死に働いてその当番を果す。まだその上に、
（亭主に死にわかれ当番）

とか、
（むつかしい姑にいじめられる当番）
などという当番の札を二重三重に首におかけになる。一つがすんで首からはずれると、また一つをおかけになる。
誰の首にもかかっているわけである。
どうかした拍子に、すべての当番が終って、首になんにもかかっていないことがある。
それがいまの私である。
すべての「エライ目当番」を果してしまった。
この当番をさぼって逃げようとか、人に押しつけようとか、腹立てて突っ返そうとしたりすると、また、神サン（か何かわからぬ、大いなる存在の超越者）は、
（太い野郎である）
というので、
（当番をのがれようとしたバツの当番）
の札をまた、おかけになる。
図々しくさぼったり、あつかましく人に押しつけたり、怒ったり泣いたりせぬほうがよい。
なぜなら、当番というのは、苛責（かしゃく）や罰とちがう、いつか自分のぶんは果し終り、他人の番へまわるのであるから、そうおちこまないでもよい。廻り持ち、当番制、神サンは雲の上で、人間の首を杭に見たてて、
（むふふふふ、そうれ、「横暴な夫に泣く妻の当番」じゃ！）
と投げ輪あそびのように、人間の首に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.